
Angel Beats! Orchestra

瑠璃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Angel Beats! Orchestra

【Nコード】

N0751X

【作者名】

瑠璃

【あらすじ】

どこにでもいるようなとある1人の少年。ただ毎日を家族と、友人と、恋人とすごしていた彼。そんな彼の日常が壊れ、死後の世界へと旅立ってしまう。そんな彼を待つのは、希望ある青春か。あるいは絶望しかない現実か。これは、シアワセを突然失った少年とその仲間の物語。

オリジナルキャラクター設定（随時更新）（前書き）

ネタバレ有 題名通り、オリジナルキャラクター設定集です。新しく人物が登場するごとに、更新していきます。作品が進めば、キャラクターの過去とかも入れていくかもしてません。

オリジナルキャラクター設定（随時更新）

1. 山本秀一^{ヤマモトシュウイチ} 17歳（高校2年）

戦線メンバーの一人。所属は戦闘班で、基本的に偵察、哨戒などの隠密系（ぶつちやけ地味）の仕事を得意とする。

基本兵装はハンドガンだが、マシンガンも使う。

また、楽器を扱うのが好きで、とくにドラムを好む。

基本なんでも簡単にこなしてしまうが自分に自信がなくまた、彼女である千尋には頭があがらない。

ちよつと女々しいところがあり、そのことでよくおちよくられる弄られキャラである。戦線メンバーでは珍しい頭の良い人間でもある。こころ一番でちよつとかっこよかつたりするが、普段はやっぱり格好悪いのである。

2. 嶋田千尋^{シマダチヒロ} 16歳（高校1年）

戦線メンバーの一人。所属は戦闘班だが、基本的には陽動班の護衛係。たまに秀一の手伝いをしている。性格は快活だが、どこかプライドが高く、いつも秀一にはきつくあたってしまう。本人自身、そのことについて悩んでおり、そのあたりの事情で、よく関根などにかかわれる。しかし、秀一には絶対の信頼をおいており、なんだかんだでいい雰囲気だったりする。（ツンデレ乙乙）楽器類を扱うのは不得意だが、ボーカルとしての素質があると岩沢に言われている。

オリジナルキャラクター設定（随時更新）（後書き）

こんにちは、構成そっちのけでキャラ設定作っちゃいました。私自身、キャラ設定ができていないと作品をかけない人間でして、とりあえず勢いで投稿しました。前書きにもありましたが、この設定はキャラ登場毎に追加していきます（無理ある設定多かったです）。構成そっちのけなので、今後どうなるかわかりませんが、マイページでやっていこうと思っていますので、よろしくお願いします。

「prelude」(前書き)

まだ短いですが、一応投稿

「prelude」

あのときから俺は前に進めないでいた。どうしてこんなことに、なぜ彼女が、なんで俺は、そんな感情ばかりが表れては消えて、俺の中を埋め尽くしていた。学校にいるときも、家にいるときも、俺は後悔しかしていなかった。今日もそんな感情に埋め尽くされながら学校へと続く階段を上っていた。

ふと気が付いたら俺の視界は回転していた。でもそんなことはどうでもよかった・・・チヒロのいない世界で何が起ころうと関係ないのだから・・・おそらく俺は階段から落ちて頭を打ちつけたのだろう。とても頭が痛い。なんだか視界が赤いな。そんな自己分析をしていたら、急に視界が暗くなってきた。

「ああ…チヒロに会いたい」

最後までチヒロのことを考えながら、俺の意識は暗い闇に吸い込まれていった。

ハジマリ(前書き)

どうも瑠璃です。テストひと段落したんで1話投稿します。

ハジマリ

ppp ppp ppp ppp

朝からうつとおしいぐらいアラームが部屋中に音を響かせている、もう起きなきゃいけない時間だ。しかしベッドの主である少女は未だに起きない。いや、今起きた。珍しいことである。少女は決して朝は強くない。普段は”4個目”のアラームを止めてようやく起きる。それが今日は1個目で起きたのだ、とてもとても珍しいものである。

「なんかどっかの誰かからバカにされた気がする・・・ハッ、朝から何へんなこと考えてるのよあたしは。頭でも打ったかしら？まあいいわ、なんだか今日はすっきりした目覚めだし。時間も余裕あるしね」

少女は妙に勘が冴えているようだが、とくに気にしないで登校の準備を始めた。普段の3倍増して機嫌がよさそうである。それもそうだろう、なぜなら彼女にとって大切なげば・・・存在がこの世界にやってきたのだから。

彼はまどろみの中にいた。それは寝ているようで、意識がはつきりしているようで、人によっては最高とも言える状態だった。意識ははつきりしているのに夢をみているような、そんな感覚に彼『山本 秀一』は揺られていた。見ているのは過去の記憶。親、姉弟、親戚、友人、そして彼女。彼の楽しかった日々、苦しかった日々が今彼の夢になって駆け抜けている。その夢も終わりに近づいてきた、

最後の記憶。階段からの転落である。そしてその衝撃が体を突き抜けたと思つた瞬間

「ハッ、なんだ今の夢は・・・夢？あれ？でもあれは確かに俺が経験してきたことのはず。じゃあ何故？そういえば確か俺って階段から落ちたんだよな。あのバカみたいに長い階段から・・・なんで生きてるんだ？てかここどこだ？」

青年の周囲には木々が生い茂っていた。最後に覚えているあの長い階段でもない、まったく知らない場所だった。

「森、森の中なのか？なんでまたこんなところにいるんだ俺は。あの階段じゃない。俺の知ってる場所でもない。これ、もしかして積んだ？」

青年しかいない森のなかで、そのつぶやきだけがさびしげに辺りに響いた。

「本当にここはどこだ？学校の周りにこんなに木々が生い茂ってるってなんてなかったはずだし・・・」

秀一はひたすら考えていた。確かにあの馬鹿みたいに長い階段から落ちたのは間違いない。何故ならそれをはつきりと記憶しているから。というかあの衝撃は忘れたくても忘れられないだろう。何度も頭を石の階段にぶつけていたのだから。

「とにかくこの雑木林っぽいところからさっさと出ないといろいろまずいな。主に俺の気分的に。これで夜になったらほんとに最悪だよ。頼むから何も出ないでくれよ」

何かに怯えている様子の秀一。まあそれも仕方のないことである。だってお化けとか大の苦手だし。以前、千尋が生きていたころはよく千尋や友人達とお化け屋敷などにも行ったものだ。そのときの彼といったらもう、残念なのだ。これ以上になく残念。ひたすら怯えて千尋にしがみ付くわ、出口の直前でお化けを発見し、それから逃げるように走り出したのである。おおよそ、普段の彼には不可能な走り方だった。ドリフト走行する人間なんて始めて見たのだから。あ、このモノローグ的なものは基本的に語り口調だよ。誰の語りかはまだ秘密だけどね。

「なんか人に聞かれたくない。そう、黒歴史的なものをばらされる気がする・・・まあ気のせい、だよな？そんなことより早くここから出ないと」

まったく、恋人同士こういうときだけは妙に勘が冴えているみたいだ。まあ気づくことはないと思うが。

「ほんとにここどこなんだよ」

さつきから何度目かわからないぼやきに答えてくれる人なんて・・・

「ここでなにをしているの？」

いた。秀一が見た先には長い銀髪の、よく見たらポニーテールの少女が立っていた。

「こんなところ？さあ、まず俺はここがどこだかわからないし・・・」

「そう。あなたは来たばかりなのね」

「は？」

あ、この少女どうやら詳しいことを知っているみたい。厄介だなあ。まだあたふたする秀一の姿を見たかったんだが・・・仕方ない、諦めるか。

「？」

「ここはいつたいてどこなんだ？」

「ここは学校よ」

違う。秀一が聞きたいのはそういうのじゃない。どうも説明しづらいがまあ私には関係のないことだ。

「そうじゃなくて、ここはいつたいてどこなんだ？俺は階段から落ちてケガしたはずなのに・・・どうしてこんなところにいるんだ？、いや、そのことは君に聞いてもわからないか」

彼はまだ理解していない。自分が置かれている現状に。

「ああ、ここがどういう世界か聞きたいの？それならここは、“死後の世界”よ」

状況を把握しきれてない秀一に告げられたのは馬鹿げた現実だった

「死後の世界…？」

「そう。死後の世界」

秀一は混乱しているだろう。見た感じしているようだ。だってまるで、”何言ってるんだコイツ…死後の世界？なんだそりゃ、極楽浄土かなにか？死後ってことならコイツは？ああ、天使か？いや、何わけからんこと考えてるんだ俺は。”みたいな感じの顔しているし。

「仮にここが死後の世界として、なんで俺はここにいるんだ？」

「それはあなたが死んだからよ」

そう、彼は”死んだ”のだ。秀一自身が一番把握している現状だろう。むしろ死んだはずだからこそ、なぜこのように普通に人と話しているのが理解できなかつた。

ハジマリ（後書き）

一応投稿したけど加筆する可能性大です。（一回目終了）
文章はしばらく迷走すると思います。てかします（断言）
さあ、キャラがいつぱいでてくるけど絶対誰が誰だかわかんなくな
る自信がありますがなんとかがんばります（・・・）

現状理解そして・・・（前書き）

はい。どうも瑠璃です。まだ3話とはいえ原作キャラが生徒会長し
か出せてないorz早く戦線メンバーと絡ませたい！他に考えてい
るオリジナルキャラと絡ませたい！オリジナルは設定組んでるキャ
ラがあと1人！妄想はとまらないが文章にできない！そんなもどか
しさを抱え込みながら書いた3話です。どうぞ。

現状理解そして・・・

秀一 side

あの馬鹿みたいに階段から落ちて俺は死んだとばかり思っていたが、なぜか知らない森の中にいて体に怪我はなくてよくわからないまま歩いていたときに出会った少女は話しを聞いていたら彼女はこう言った。

「あなたが死んだからよ」

いや、あの高さから落ちたはずだから死んだということに関してはありえそうだから無視するとして。死んだのならなぜ今体はなんともないのだろうか・・・それにさっきからちよくちよく誰かに馬鹿にされたような気がするのなぜなんだ？まあこれは関係ないのかもしれないけど。死んだなら死んだで構わない。いや、構わないことはないんだろうけど。とりあえずいったんどういところなのかを聞いたほうがいいか。

「わかった。とりあえず俺は死ぬような怪我をしたかもしれない。まあ俺がはつきり覚えているわけじゃないから断言はできないけど。とりあえずどういところか説明してもらってもいい？」

「ごめんなさい。説明したいのだけれどもそろそろ会議の時間なの。学園までは一緒の行くから、学生寮で待ってもらえる？」

「いや、待つのはぜんぜん構わないんだけど。学生寮って部外者が入れるのか？そういうところのセキュリティとか厳しいんじゃない？」

「問題ないわ。だって待つてもらうのは、あなたの部屋なんだから
はい？アナタの部屋？あ、鉦の部屋。鉦だけ管理とかしてるのか
？いや、さすがにこれには無理があるか。」

「なんで俺の部屋があるんだ？俺はこの学園には来たこともなければ
入学手続きをした記憶もないんだが？」

「それはわたしにはわからないわ。この世界にやってきた人は全員
この学園で生活しているのは確かなのだけれど」

「なんだかよくわからない状況になってきてるけどどうすればいい
んだか。何もしていないのに入学（転入）手続きが終わってて学生
寮まで完備。彼女が言ったとおり本当に死後の世界ならこれほど都
合のいい世界は他にないのではなからうか。」

「ついたわ。その案内板を見て事務室に行けば、部屋の鍵や制服
が貰えるから。それじゃ、わたしは会議に行くから」

「あ、ああ。案内ありがとうな」

「そういつて去っていった彼女。あ、そついや名前聞いてないや。
どうするかなあ・・・今から追いかけて聞くつてもなんだかかつ
こ悪いというか、締まらないというか。まあ、なんとかなるか。そ
う思いながら事務所に歩いていくと、おそらく事務室らしきところ
から生徒がこちらに向かって歩いてきていた。その顔を確認したと
き、俺は自分の目を疑った。」

「何故ならそれは、見間違はずのない。最愛の千尋にあまりにもそ
っくりだったから。だから思わず俺はこう漏らしていた」

「千尋……?」

すると正面の彼女がこちらに気付き驚いた様子で

「え?……しゅ、う……?」

秀一 side out

現状理解そして・・・（後書き）

はい。3話でした。個人的に伏線立ててたつもりだったんですが秀一と千尋の再会のお話でした。今後はこの2人が話の主軸になっていくのかな？まだまだ私の中での方向性は（妄想が暴走して）定まっています！

本編とは関係ない作者の休日の出来事。（もちろんAngel B eats！関連ですよ！！）

あるときの私と友人の会話。というか格闘戦byAB！かるた編出演、瑠璃（私）、岩沢（友人その1）、天使（友人その2）、ユイ（友人その3）、秀一（友人その4で秀一のもとの人） 全員男です。

瑠璃「よし、昨日買ったかるたやろうぜー！」

岩沢「よしやろう！でも他に人いる？」

瑠璃「椎名とユイと秀一あたりは？」

岩沢「じゃあ瑠璃は秀一つれてきて。俺ユイと椎名に声かけとくから」

瑠璃（・・・）b

全員集合後（秀一のみお昼を食べている）、読み手をユイがやり、ユイのもつ某idでAB！関連の音楽を聴きながら開始された。

あ、ちなみにこれが私たちの中でのルール

- 1 両手は膝、あるいは腿の上が基本
- 2 シークレットと呼ばれる裏にされた札が存在する。
- 3 読まれた札がシークレットだった場合は各自裏返された札を1枚選ぶ。

4 読まれた札を取った者以外はお手つきとなり次の札は取れない。
(1回目で全員はずれだった場合はリセットとなりシークレットを選びなおす)

5 なんかペナルティというか警告、注意、嚴重注意の3つがよくわからないものが存在する。

6 これらは警告3で注意1。注意3で嚴重1。と順々にレベルが上がっていく

7 嚴重注意が3溜まると恐ろしい罰ゲームがまっている。らしい。

8 注意に関しては、思ったものが注意と促し、その場で全員で会議される。

9 このルールは読み手捕り手関係無しに適應される。

10 よくわからなくなった札は読み手の札(空札)となる。
ぐらいだったはず・・・なにかあったらまた追加します。

ユイ「それでは。あさはかなr」 バンッ!!!

椎名「よっし！」 勢いよく取る。

瑠璃「まあしゃあない」

岩沢「・・・」 札に興味を示さない。

秀一「もぐもぐ」

ユイ「それでは、お前、これなのか？」

椎名「え〜つと・・・」

岩沢「う〜ん・・・」

瑠璃「え〜・・・あっ」 目の前にあつた札を残念そうに取る。

椎名「お前誘つたんだからもうちよいやる気だせよ！」

瑠璃「だって欲しい札じゃねーし・・・」

秀一「もぐもぐ」

ユイ「はい次行くぞ。ゴホン、そ〜」ババンツ！！！！

岩沢「いよっし！！！！」 めっちゃいい笑顔でガッツポーズ

瑠璃「チツ・・・」 岩沢に競り負けた。

ユイ、椎名「お前等はやつ！」

岩沢「だって岩沢さんだし」 ドヤ顔

瑠璃「まあ岩沢さんだしな」

秀一「もぐもぐ」

椎名「秀一の写真集（ボソツ）」

ユイ、岩沢、瑠璃「ブツ、ククツ」 笑いを必死に堪える。

瑠璃「秀一のソロアルバム（ボソツ）」

秀一以外「！！！！！」 爆笑しすぎて言葉にならない。

椎名「秀一のセミヌード（ボソツ）」

秀一「（、・、・、）」

もちろん秀一以外嚴重注意貰いました。

ユイ「よし、気を取り直して。実は私、き」 全力で熱演中

椎名「はい」そんなユイを気にせずさっさと取る椎名

ユイ「orz」

瑠璃、岩沢「椎名、注意2」

椎名「なんで!？」 ユイにまだ気付いていない。

岩沢「ユイが全力でやってるのに邪魔しちゃだめだろ！」

瑠璃「見てみるよユイを。哀愁漂わせてるじゃんか」

椎名「ええ〜・・・」 納得しきれない。けど押し通される。

ユイ「続いて、天使、しゅ」 気持ちを切り替えて読み出す

瑠璃「ハイイイツ！！！」 岩沢のとき以上に全力全壊で取りに行

く。

結果、机の上に置いていた札が床にばら撒かれて嚴重注意を貰う。しかし遊佐のカードが取れたのでホクホクな瑠璃。まあこんな感じでもいい勝負で、途中から参戦した秀一も持ち前の頭脳で取っていくから各々取った札はほぼ同じ。最後に残った札が直井の札だとわかった瞬間。

岩沢、瑠璃「・・・」取る気ゼロ

秀一、椎名「お前等直井だからってその態度はないだろ！」と、言いつつ椎名がスツと取って行く。

この戦いの結果。

岩沢、11枚

瑠璃、11枚

椎名、11枚

秀一、10枚

ユイ、1枚

うん。これは言っておくけどこの話のために捏造したわけではないからね？各人全力で戦った結果だからね？途中かなり端折られてるとかそんなことはないからね？もうこっちが本編じゃねとか思った人、間違いだからね？

思い出しながら書いてて楽しくて本文より文章が増えたけどキニシナイ。4話たぶん千尋サイドからの文になるんだろなあ・・・

こんな状況だが反省も後悔もしていない！キリリッ

では次回更新で（・・・）ノシ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0751x/>

Angel Beats! Orchestra

2011年11月7日23時08分発行